

国際学生セミナーの一つの到達



第4回国際学生セミナー運営委員長
東京外国語大学助教授 中嶋嶺雄

セミナー・ハウスの丘は、もうすっかり冬枯れてはいたけれど、そこには、若者たちの真摯な情熱と鋭敏な精神の作興とが国籍の壁をつきぬけてたぎっていた。その熱気は、しかし爽やかなものであり、セクション演習や運営委員を担当された先生方、セミナー・ハウスの方々の一同に催したであろう充ちた感懐と交わって、このセミナーの参加者のみが味うことのできたハーモニアスな雰囲気をももたせていた。ふと後方をふりかえると、丘陵の彼方の富士の白銀が心憎いばかりにまばゆかった。

こうして三泊四日の第4回国際学生セミナーを閉じることができたが、もとより「新しいアジア像を求めて In Search of a New Self—Identity as Asians」という今回のテーマにかんしての統一的な認識や方向性がそこで発見されたわけではない。その点は、依然として個々バラバラに多様であり、甲論乙駁するものであったろう。にもかかわらず、世界の中のアジアと日本のかかわりあいの大きさ、その重さといったものを自覚しつつ、明日のアジアをともに構築してゆこうとする者の精神の糧として、このささやかなセミナーがもたらした諸体験は、やはり貴重なものであったし、やがて目に見えない果実を日本の、そしてアジアの各地で結びゆくであろう。私自身も、多くのことを学ぶことができた。

想えば、「アジアの平和と開発」を共通テーマに多くの方々の善意に支えられて毎年1

回開かれてきたこの国際学生セミナーは、第1回「日本の技術—その歴史的社会的性格」、第2回「新しい国際環境のなかで」、第3回「日本を考える」にひきつづき、多くの成果と今後の課題を残しつつ、今回にいたったのである。その意味でも、今回のセミナーは、これまでのセミナーがもった意義の連続性という性格と任務を帯びていたが、一方ではセミナーの形式をはじめ、テーマの選定、参加学生の選考などの点で、これまでの反省に加え、そこに新しい工夫があったことも事実である。私自身、第2回と第3回のセミナーにはセクション演習の担任として、今回は運営の責を負う者として加わってきたが、従来、このセミナーの一つの問題点は、留学生の参加が比較的少ないことであつた。ところが、今回は11カ国からの留学生27名の応募があり、そのなかには遠く山口大学から参加したヴェトナムの留学生も含まれていて、文字通り国際学生セミナーのかたちをととのえることができたのは幸いであつた。一方、日本人学生の応募は、予定人員の倍近くにおよび、これも嬉しい悲鳴であつたといえよう。もとより、このセミナーは、選ばれた特定の参加者だけの自閉的な討論の場ではない。従って、応募者全員の参加を実現できないものかと努力したのだが、やはり収容人員とセミナーの効果的な進行のために参加者の人選をおこなわざるを得なかつたことは心苦しいところであつた。

このような盛況は、今回のセミナーに際し、それぞれ深い学識に裏付けられた個性的な講話や指導をおこなってくださった諸先生方への期待の大きさの反映であったと思われると同時に、アジアの諸問題を考えることの重要性についての認識が、学生諸君のあいだにさらに深まっていることの証左であろうと思われる。それだけに、今回のセミナーでは、日本の経済進出やエコノミック・アニマルぶりにたいする通俗的な批判や反省、いわゆる贖罪論や懺悔論、援助の量や質についての政策技術的な議論、偽善者ぶった経済開発論や経済協力論といった次元を越えて、アジアの切実な諸現実を一方にふまえながらも、アジアにたいする新しい文明観・価値観の探求といった問題、アジア諸国の内在的諸要因への厳しくも冷静な診断といった問題にまで討論が深まっていった。そのような討論の意味をめぐってあるセクションでは内部に一つのコンフリクトが生じ、そのことが全体討議の場でも学問・教師・学生といった普遍的でしかも個別的な一人一人の参加者の自己像を照し出

す問題として全参加者に多くの問題をつきつけることとなり、この点でも今回のセミナーは大きな収穫を得たように思う。なぜなら、このようなセミナーの真の成功は、形の上での会議の美しい完結にあるのではないのだから。

3日目のシンポジウムとオープン・ハウスはまったく新しい試みであったが、たまたま滞日中のエル・コレジ・ド・メヒコ教授のシントラ氏や国際学生セミナーOBともいえる東大大学院の韓国留学生のS君をはじめ、多くの一般参加者をも得て、深夜の交歓会にいたるまで楽しい土曜の一日になったと思う。

こうして国際学生セミナーは、ここによりやく一つの到達点を見出すことができたのではなかろうか。お別れパーティーでの「螢の光」は、激動の74年を送る調べでもあったと同時に、20世紀最後の4半世紀をこれから担おうとする若者たちが、新しいアジア像をさらに求めて散りゆくための誓いの調べであったような気がする。

指導の先生方
(ようこそ広場にて)



THE 4th INTERNATIONAL STUDENT SEMINAR

PEACE AND DEVELOPMENT IN ASIA

アジアの平和と開発

—新しいアジア像を求めて—

IN SEARCH OF A NEW SELF-IDENTITY AS ASIANS

DECEMBER 12-15, 1974

第4回国際学生セミナー報告書

財団法人 大学セミナー・ハウス

INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.